

第5回日本赤十字看護学会学術集会

公開講演

グレートジャーニー
－人類600万年の大遠征－

Great Journey.
－ The Big Expedition in 6,000,000 Which Mankind Had Done －

講師 関野 吉晴 SEKINO Yoshiharu (武蔵野美術大学)
座長 畑尾 正彦 HATAO Masahiko (日本赤十字武蔵野短期大学)



関野 吉晴
SEKINO Yoshiharu



畑尾 正彦
HATAO Masahiko

キーワード：グレートジャーニー、大遠征、人類、世界観

Key Words : Great Journey、Big Expedition、Mankind、World View

I. グレートジャーニーのはじまり

アフリカで生まれた太古の人々が世界中に拡散して行く中で、最も遠い南米大陸最南端まで達した人々の旅路を、イギリス人考古学者のブライアン・フェイガンは、グレートジャーニーと名付けた。私が小学校の頃、人類の誕生は100万年前と教わった。440万年前の骨が発見された10年ちょっと前には400万年前と言われていたが、最近では600万年前の骨が発見されたため、人類600万年の旅となった。新発見のたびに、どんどん人類の歴史は古くなってきている。ところが、遺伝子研究が進歩した現在、チンパンジーやゴリラのような類人猿と共通の先祖から分かれたのは、700万

年前といわれており、グレートジャーニーは700万年までさかのぼる可能性がある。ともかく、アフリカで生まれた人類がアフリカを離れたのは約180万年前と言われており、ヨーロッパやアジアなど各方面に拡散し、適応していくのである。アフリカを出た時の人類は、もう火を使うようになっているが、原人といわれており、私たちの直接の先祖はホモサピエンスという現代人なのであるが、15万年、20万年前にアフリカで生まれたと言われている。

II. 関野吉晴のグレートジャーニー

古代の人々の足跡を逆ルートでたどってみたの

で、私の旅はプライベート・グレートジャーニーとか、マイ・グレートジャーニーと言った方が正確である。太古の人達が感じたであろう風、寒さ、暑さ、埃、匂い、雨、みぞれ、雪などを、自分の肌で感じながら旅をしたかったのだが、いろいろな事情でできなかった。

誰もが一度は考えたことがある自分たちの由来について“自分たちはどこから来たのだろうか、自分たちは何者であろうか”というような普遍的な問いを、多分、太古の人も家族を連れて、仲間と歩きながら、砂漠やサバンナあるいは森の中でたき火をしながら、森の葉っぱのすれる音や虫の声、鳥の声を聞きながら考えたと思う。太古の人と同じような旅はできないが、動力を使わず、自分の腕力と脚力だけで旅をした。ただ、昔も使えたイヌ、ウマ、ラクダ、トナカイについては、自分で練ればよいことにして旅したのである。

グレートジャーニーという布を織るには、縦糸と横糸が必要である。その縦糸は南米からアフリカまでの線をつなぐこと、だいたい40幾つかのミニ・エクスペディション（小さな遠征）のつながりになっている。40幾つというのは、アラスカの西端の犬ゾリ移動やパタゴニアの氷河を200何十km移動、ゴビ砂漠のラクダ移動とかである。そして、横糸は、いろいろな人々や素敵な人物との出会い。素晴らしい村にはできるだけ長く滞在し、同じ屋根の下で、同じものを食べながら暮らすことである。できあがった布は、一番大切な土地の人々から教わったものの見方とか考え方で、これが1枚の布を織るということなのである。

自分たちの世界だけに住んでいると、あまりにも当たり前なので気付かないことでも、外の人の見方、考え方を知ると、自分たちの当たり前のことが当たり前ではないのだと分かる。例えば、私たちは箸を使っている。これは日本では当たり前のことだが、ある社会では手づかみで食べるのが当たり前で、他のある社会ではフォークを使うのが当たり前なのである。要するに、地域や文化によって、当たり前とすることは異なっており、本当に特殊なものなのである。ずっと同じ文化にいと、そこに慣れてしまい、そのことに気付かず、すべて暗黙の了解で暮らしてしまう。暗黙の了解の中で生きているから、概して、自分たちの当たり前が、本当に世界中で普遍的なことだと思

いがちだが、決してそうではない。いろいろな考え方やものの見方、さまざまな世界観が世界中にあり、それらを学ぶことで、足元がよりクリアに見えてくると思いながら、ずっと旅をしてきた。

Ⅲ. グレートジャーニーの縦糸を結ぶ旅 (ビデオのナレーションより)

2002年2月10日午前9時29分、足かけ10年53,000kmにもおよぶ旅、探検家であり、医師でもある関野吉晴のグレートジャーニーはついにゴールした。そこは、夢にまで見たアフリカ大陸、野生の王国であった。東アフリカ・ラエトリに残された2本足で立っているアフール猿人の足跡、大きさからみて大人2人、子供1人、世界最初の家族とも言える。およそ600万年前、人類の祖先は進化しながら気の遠くなる旅に出た。ユーラシア大陸からベーリング海峡を経て、アメリカ大陸を南下する大移動は5万kmにもおよぶはるかなる旅となった。グレートジャーニーの道を、関野は逆方向からさかのぼり、今年2月踏破した。旅は嵐の大地パタゴニアに始まり、近代的動力には頼らず、自らの脚力と腕力だけで突き進み、インディオたちに悪魔の山と呼ばれる秘境をザイルだけを頼りに垂直の壁をよじ登った。こうして雲の上の大地にもグレートジャーニーの足跡を刻んだのだ。グレートジャーニーは出会いを紡いでいく旅でもあった。

1996年、2つ目の大陸、北米に入る。確実に時間は過ぎていた。勤めていた病院を辞め、2歳になったばかりの娘と妻を置いての旅立ち。それから3年、娘はいつの間にか、字が書けるようになっていた。夏のアラスカは躍動する命の季節。地球という星のすごさ。ザトウクジラの群れがニシンを追いつめて捕獲する瞬間。1997年、ベーリング海峡横断。1998年、冬の極東シベリア。氷点下40度の世界。夏のシベリアは更に過酷な旅。永久凍土ツンドラが大湿地帯に変わり、行く手を阻む。

1999年、モンゴル。グレートジャーニーはついにアジアに入った。世界で最も北に位置する仏教寺院。砂漠地帯はラクダで移動、気難しい相棒、しかし、砂漠でこれほど頼りになるやつもない。想像を絶する砂嵐。まるで針のように砂が突き刺さる。シルクロードを西に向かう。そこは灼

熱地獄。ヒマラヤの北と南を往復するキャラバンにも同行した。チベットで仕入れた塩を、ヒマラヤを越えて穀物と交換する。標高5,000mの峠越え、家族一丸となって山を越える。10歳に満たない子供たちがそれぞれの役目を果たしている。

2001年2月、グレートジャーニー、ファイナルの旅はカザフスタンから始まった。関野はシルクロードを更に西に向かう。キルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタンを通してイランに向け、トルコからシリアに向かい、そこで進路を南に取ってアフリカを目指す、エジプト、スーダン、エチオピア、ケニアを経て目的のタンザニア・ラエトリまでおよそ12,000kmの旅である。3月、すっかり春らしくなったイランを進む。ホメイニ師率いる革命から22年、厳格なイスラム社会だったイランも少しずつ変わり始めている。そして、人々は関野を受け入れてくれた。4月、見えてきたのはご存じ死海、ここは世界一塩分濃度が高い場所。5月、シナイ半島を走るハイウェイ、熱帯に突入した。スエズ運河、その向こうは、夢にまで見たアフリカ大陸。関野はゴールを目指す。立ちほだかるのは暑さ。11月、スーダンに入った関野は、ラクダでリビア砂漠を縦断。関野吉晴の足かけ10年にわたる壮大な旅。南米最南端から1歩、1歩つないできた1本の道が10年目にして迎えるゴール。感動最終章、グレートジャーニー・ファイナル。灼熱と感動のアフリカ、10年目のゴール。関野の夢が、今、完結した。

IV. 人類の起源を求めた旅のゴールとは

初めてアマゾンに行った時は、その先住民の人たちが私たち日本人とあまりにも似ているのに驚いた。要するに、村に入ると親戚や友人の誰かと似ている人がごろごろいるわけである。別れ際、彼らは太鼓や弓矢、いろいろな飾り物をお土産にくれ、そのまま町に帰ってきて裸足で太鼓と弓矢を持って歩いていると、必ず声をかけられる。そして、いつも決まって「あんた何族だい。」と聞かれるのである。ロシアとアメリカ合衆国の境になっているベーリング海峡は、最短距離で80km、水深は一番深いところでも50メートルしかないのである。氷河期は今より海面が100メートル以上低かったため、この海底50メートルの

ところは陸地だったといえる。多分、その時代にシベリアに進出していた人たちが、マンモスやトナカイなど大型動物を追いかけいているうちにアラスカに着いてしまったのであろう。更に、南に旅した人たちが、アメリカインディアン、中米の、あるいはアマゾン、アンデスの先住民なのである。南米で付き合っている人たちは、いつ、どこから、どのようにして来たのかという旅をしたいと思っただけなのだが、私のグレートジャーニーである。

最初はモンゴロイドの起源を求める旅をしたかったので、シベリアやモンゴルにゴールを求め、骨のかたちや皮膚の色、赤ちゃんのお尻が青いということで調べたのだが、ヨーロッパ人でもお尻の青い子が2~4%生まれるのである。逆に、アジア人のお尻がみんな青いわけでもなく、最近では日本人でもお尻が青い赤ちゃんが少なくなっているという話をよく聞くことがある。要するに、モンゴロイド・スポットというか、蒙古斑では区別がつかないのである。また皮膚の色では、アジア系の人間は黄色いかというと、黄色い人はあまりおらず、逆にヨーロッパ系のアーリア人の子孫であるインド人の支配階級の方が、私たちよりはるかに黒く、いわゆるコーカソイド、ヨーロッパ系だからといっても白くないので、肌の色でも分からない。さらに、目を見ても、一重や二重、蒙古ヒダとかあるが、アジアの北と南では顔が全く違うので、身体的特徴では区別がつかない。遺伝子レベルでも区別がつかず、ただタンパク質や酵素、血液型など、いろいろな要素をミックスして比べてみることで、遺伝子の近さだけが言えるのである。日本人とイギリス人、日本人と東南アジアの人を比べると、やはり日本人と東南アジアは近い。日本人と東南アジアの人、日本人とチリの先住民を比べてみると、チリの先住民の方が近いのである。

モンゴルからずっと中国の西域、いわゆるウイグル自治区(ウイグル人の住んでいるところ)、カザフスタン、キルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタン、そしてイランと、シルクロードを旅した時のことである。モンゴル人は日本人と本当に似ており、ウイグル人になると少しエキゾチックになってくる。イランの手前のトルクメニスタンではずっと民家に泊めてもらって旅したの

が、日本人に似た人がいるので出身を尋ねたらカザフだというのである。要するに、カザフスタンで民家に泊めてもらってその人たちに会ったら、さほど日本人と似ていると思わず、トルクメニスタンで出会ったからそう思ったのである。どこかで突然変わったのではなく、グラデュエーションのように徐々に変化したので気がつかず、いつの間にか変わっていたのである。モンゴロイドやコーカソイド、ネグロイドも、元をたどっていけば人類という共通の先祖を持っているわけで、要するに人類の起源を求めればいいという理由でゴールはアフリカになったのである。

V. 南米～中南米の旅と人々の出会い

アマゾンの人たちと30年間、私は付き合っている。この30年というのは、ペルーアマゾンのマチゲングの人たちにとって非常に長いのである。彼らは15～16歳で赤ちゃんを産むので、30歳過ぎで孫が、50歳前にはひ孫ができる。だから、30年間付き合っていると5世代の付き合いになってしまう。この人たちは、自然の一部あるいは自然と一体となって暮らしている。彼らの村に入ってハンモックにゴロンとなると、刃物とアルミ鍋以外、素材の分からないものがなく、自分たちに必要なものは森や川から採ってきて、全て自分たちで作ってしまうのである。私たちは月の大きさと関係なく生きていけるが、アマゾンやアンデスの人たちは月の大きさ、満月か、新月かで生活が全く違ってしまふ。というのは、満月だったら、天気の良いれば、地図や本が読め、旅ができる。逆に、新月や曇っていて星が見えない時は、30cm先も見えない漆黒の闇なのである。彼らは時計を持っていないので、1日の時間を太陽の動きでみる。また、カレンダーもないのでひと月は満月から満月なのである。このように、自然の動きとかなり歩調を合わせて生きていく人たちの特徴は、効率を優先させず、競争を好まず、時間の流れがゆったりしていることである。

南米へ初めて行った時、私はこの人たちにとっても腹立たしくいらした。例えば、食べ物を探りに行く時は、朝早く何も食べずに出て行くので、夕方にはペコペコになって帰ってくる。獲物や魚を捕って村に帰ってくると、すぐ食べたいのだが、

それから薪を集め、火をおこし、まず腐りやすいものから食べるので、先に魚をさばき、料理を始めるのである。狩りに行った組と漁に行った組、女たちと子供の居残り組がいて、昼間どんなことがあったかをみんなで話す。子供たちが集まってきた取っ組み合いをし、そのうち飽きて肩を組み、他の取っ組み合いを見ている。年寄りも杖をついてやって来て話に加わる。その時、村あるいは家族の団らんがあり、1時間、ひどい時は2時間待って、やっとイモが煮上がり、魚が煮えて出てくるのだが、それは非常に美味しく、何か家族のおいがする究極のスローフードなのである。

狩猟をする彼らと付き合っ、いろいろな人と出会ったが、彼らには生きていく目的や生きがいとかいうものがない。彼らは、ペルーやボリビア、ブラジルの国境地帯に住んでいるのだが、彼らにはペルー人だという意識はなく、もちろんペルー人だということすら知らないのである。彼らは海を見たことがないだけでなく、その存在すら知らないし、砂漠も知らない。彼らの地図は森と川からできていて、その世界の中心は川なのである。自分の住んでいる川に関しては、何でも知っており、どんな小さな支流でも、枯れた沢でも名前があり、どこへ行けばどういう獲物が捕れて、どういう薬草が採れるのか全部知っている。しかし、これが隣の川へ行くとちょっと怪しくなり、その隣の隣に行くと、ほとんど分からないという状態になってしまうのである。

農耕を基盤としている私たちは、一生懸命タネを植え、畑を耕し、苗を植え、半年後、何年後かの楽しみのために耕しているわけで、それなりに我慢していれば収穫という喜びがある。しかし、彼らは狩猟なのですぐに結果が出る。このため、長期的な目的はなく、短い1日あるいは数日間だけの目的を持って生きていくのである。彼らは楽しみを先送りせず、今を楽しんでおり、今を充実させて生きるという意味では、彼らの方が優れているような気がする。

それは、彼らのあいさつの仕方や言葉に如実に表れているのである。彼らと会った時に「アイニヨビ」と言う。「アイニヨ」というのは「存在する」という意味で、「ビ」というのが接尾語で「おまえ」なのである。要するに直訳すると「おまえは存在するか」というのが「こんにちば」であり、「ちゃ

んと生きているか」、「存在しているか」ということが大事だということなのである。彼らは、1ヘクタールくらいの焼き畑を作って、バナナ、イモ類、サトイモ、一部トウモロコシなどを栽培している。彼らの行動半径は10kmほどで、生活に必要なもののすべて材料を近くから採ってくる。少なくとも30km以内で全部すませ、男たちが狩りに行くのは、週に2～3日、労働時間は私たちに比べて極めて少ない。彼らは究極の地産地消をやっているのである。しかし、彼らも私たちと同じように家族や仕事仲間がいて、酒を造り、踊りを踊る。カラオケの機械がなくても、歌を歌い、楽器で音楽を奏でたりする。本はないが、民話や伝説のかたちで物語は存在し、楽しみの幹や根っこの部分は、私たちと共通の面が多いのである。

南米、中南米には、チンパンジーやゴリラのような類人猿はいないが賢いサルがいる。コロンビアの森では、7種類のサルがうまく住んでいる。アマゾンの木というのは40～50mあり、その高いところに大型のウーリーモンキー、クモザルというのが木の実を食べて住んでいる。この大型のサルは椰子の実が柔らかくないと食べられないが、フサオマキザルは椰子の実が成熟して硬くなっていても、竹の上に置いて石でたたき割り食べてしまうのである。ホエザルというは葉っぱばかりを食べているので、他のサルと競合せず生きている。その他、夜間行動するヨザル、人間が一度伐採した後にできた二次林に住むリスザルやティティザルがいて、空間的な位置や時間、餌を区分し、競争せず住んでいるのである。

ベネズエラのヤマノミという人たち、彼らも狩猟で生活しており、ペルーの人たちと同じような生き方をしている。男は狩り、女たちは採集をしていて、栄養源のカロリーの7～8割は女の人、ただしタンパク質の半分は男で、それで何とか男は面目を保っているのである。水くみや薪拾い、重たいものを背負うのは女の仕事、その上、子供がたくさんいて、女の人は大変である。こういう人たちのことを、原始共産制じゃないかと言う人がいるのだが、今の地球上にも、過去にも、原始共産制という社会は多分なかったのではないかと私は思っている。というのは、彼らの所有権はすごくしっかりしており、野生の椰子の木でも最初につばを付けた人のものなのである。彼らの所有

意識が、私たちの社会と違うのは土地に関して「おれのものだ」とは言わないことである。土地は神が与えてくれたものであり、自分がコントロールできないものまで「おれのものだ」とは言わないのである。それに、彼らはすごくもの離れがよく、誰かが3つ持っていて、誰かが1つも持っていないということではなく、ものが必要な方へ流れていく社会なのである。

Ⅵ. 北米の旅と出会った人々

アラスカでクジラを捕っているエスキモー、春になると氷が割れてリードというのができ、そこにクジラが南から戻ってくるのである。エンジンつきのアルミボートだと、氷が当たった音やエンジン音で、クジラが逃げてしまうので、エスキモーは風で動くセイウチやアザラシの皮を張ったボートで移動するのである。捕鯨シーズンの春になると、捕鯨に参加する少年たちは、学校の捕鯨休暇というのを取り、参加するのである。クジラが捕れるまではかなり待たされるのだが、クジラが捕れると非常にいい雰囲気となり、お年寄りたちがリーダーシップを取るのである。双眼鏡でぞいてクジラがいると、指示をするのは彼らである。お年寄りたちが25隻のボートに、「どこへ行け」という指示を出して、ちゃんと無線機があつて「どこへ行け」と指示する。青壮年者が1番モリを打って、別のボートがそこに行くと2番モリ、3番モリと打って、死んだらそれを引っ張って帰ってくるのである。陸にあげた解体の時も、実際は若いものが解体するのだが、指示をしているのはお年寄りなのである。普段はあまり人と会わない600人の村であるが、それを待っている間、お年寄りたちは本当に喜んだ顔で孫に手を引かれて、身体障害者の人でも車椅子で集まって来るのである。彼らは昔から捕鯨をしており、クジラを獲っている時が一番生き生きしているのである。このように、お年寄りの存在価値が認められている社会はすごく健康的に見えるものである。25隻ボートがあるからクジラは25等分にされ、各キャプテンが、それを家庭に持ち帰り、みんなに分けるのである。結局は、みんな平等に分けるようになるのである。捕鯨が始まる前の2～3週間、クジラを待っていた時、シロクマが捕れたの

だが、このシロクマの解体時に、1歳ぐらいと思われる子供が、シロクマの頭をポンポンたたいて遊んでいた。こういうのを見ると残酷だと思ふ人がいると思うが、逆に、子供の頃からシロクマを殺し、解体するところを見ており、それを料理し、食べるということを実感として理解すれば、自分たちは他の生命を食べなければ生きられないということが分かるのである。シロクマの肝臓は、ビタミンAが多すぎて食べて死者を出したことがあるため食べないが、それ以外は皮も利用するし、全てを食べ尽くすのである。要するに、命を食べているという実感があるから残さないのである。

私たちの世界は、残飯率40%と言われるほど命を食べているという実感なく、人の死や生物の死というのを見てないのではないかと思うことがある。要するに、死ぬということはどういうことなのか、命というのはどういうことなのかというのが分からないのではないだろうか。だから、そういう意味では、彼らの方がいつもお年寄りと一緒に生活しており、死と隣り合わせで、自分たちで獲物を殺し、解体し、料理して食べているわけで、私たちの世界とは違うのである。

アラスカ山脈の西方にブルックス山脈というのがあり、ほとんど半径200km以内に誰も住んでいないようなところに1家族4人だけが住んでいるのである。これは北海道に1家族だけ住んでいるようなもので、お父さんとお母さん、11歳と8歳の子たちだけなのである。アメリカのすごい面は、2カ月に1回セサナで学校の先生が教材を運んで来て、その使い方をお母さんに教えて、翌日、帰っていくのである。子供たちは、お母さんから午前中に学科を、午後は森と川から学ぶのである。この家族は非常に仲がよく、自分たちで罟を仕掛けてウサギを捕獲し、殺し、解体後に料理して食べるのである。彼らは、自分たちが食べているものは、塩以外、全部、植物も含めて命だということを実感して生きているのである。捕獲したウサギはどれも残さず、毛皮も耳当てなどに使い、内蔵を含めて全部食べるのである。洗濯機を回すため、1週間に1回だけ発電機を回すのであるが、この時、子供たちはパソコンを使った教材で勉強したり、ゲームができ、お母さんは縫い物をしたりするのである。こんなところに住んでいるから、何か偏屈な男かと思うと、お父さんは

ゲームボーイに凝っている全く普通の男なのである。

VII. 旅の果てに出た結論

いろいろな旅をしてきて、いろいろな人に出会い、いろいろなところで一生付き合っていきたいと思う人に、たくさん出会うことができた。しかし、それでも自分が住んでいるところが一番いいと思えるのである。30何年旅をしなくても分かることであるが、言葉のニュアンスがいろいろと伝えられ、暗黙の了解が得られ、説明する必要のない同じ文化に住むということが、一番気楽でくつろげるのである。例えば、熱帯の人は極北へ行ったら地獄だし、極北のエスキモーは-10℃になると暑いと言い、南太平洋に行ったら、暑くて、暑くて、地獄である。だから、楽園というのは、1人ひとり違って当然なのである。だけど、家族と一緒に好きところで住み、好きところに行け、好きな仕事を得られ、言いたいことが喋られること、そして、水と空気と大地が汚れていないことが、楽園として普遍的なことなのではないだろうか。要するに、自分のところが一番いい。もし、そういうものが奪われたら、それを自分で奪い返すか、自分でそのように変えていくしかないのである。楽園とか桃源郷というのは、探すものではなくて自分で作り出すもの、「そんなこと旅しなくても、分かりきったことじゃないか」と言われるかもしれないが、長い間旅をしても答えは同じだということ、これが旅の結論なのである。

